萬葉拾穗抄　十三

萬葉集巻第十三

雜謌

一首　作者未詳

木成　去来者　朝　尓波
ふゆこもり春さりくれはあしたには
尓波　多奈妣久
白露おき夕には霞たなひく
汗瑞能振　樹奴礼我之多尓　鳴母
はためのふるこぬれかしたに鶯なくも

ふゆこもりはるさかり
冬木のすゝこもり
よりまれいこし　おほ
こぬれのした　兄安云
梢乃下也

一首

三諸者　之　守　本　邊者
みむろは人のもる山もとへは
馬酔木開　末邊方　開
あしひ花さきすゑへは椿花さく
浦妙　曽　泣　兒　守
うらくはし山そなくこもる山

みむろもる人のもる山
三室山は人ゝもる之
いく　山をいふ
うらくはし山そ
兄安云くはしくう
はしきと山也要ぞう
らくはしうらわ
乃うらひうらは細字也
あくこもる山　兄安
山こもりたん瓢類なく
こともり上さ人のある

一首并短歌　作者未詳

霹靂之　日香天之　九月乃
かみとけのひかるみそらのなか月の
鍾礼乃落者　雁音文　未来鳴
しくれのふれはかりかねもいまたきなかす
甘南備乃　三田乃　垣津田乃
かむなひ乃清きみたやのかきつた乃
之　之　百不足　三十槻　枝丹
池乃堤のもゝたらすみそのつきえに
水枝指　赤葉　真割持
みつえさす秋のもみちはまきもちて
小　文　由良尓　手弱女尓　者有友
を鈴もゆらにたわやめに吾はあれとも
攀而　文　十遠仁　捄
引よちて峯もとをゝにふさたをり
吾者持而往　公之頭刺荷
われはもちてゆくきみかかさしに

反歌

山さつひしをみるし
かみとけのひかる　兄安云
あるいそらちなり
かむなひの　大和甘南備也
清きみたや　神田をも御屋之
かきつた　兄安云田のめく
りに垣をたてたるを云也
平安旅田屋乃垣は田の
さつひけて垣は田池い
大和乃名所也
もゝたらす　みそといふ
そてしみそのつき枝を
三十にかけたりすゝもわ
る槻乃末枝也
みつ枝さす　みつ枝捧也
よそほひたちをかしゆるよ

又按ふるにもみちのす
かさねたるゝ玉葉イすかき
き枝はねもさすなれはこ
まい御室にゆくは小野の
こゑに紅葉をさそしおて
常神山路のあるさま也
されやめる哥の作る自(ミツカラ)云
りよちて又按云門ぬ
めとし
常もことそ義外紅葉
をーとそむる也
ひとりの身見れは心にある
何ようやの影さへ多座
清くすめる也
いうひこきいりこ又按云
いらきまきのひとまうく

ひとりのみ見れはこひしみかむなひの（獨耳見者戀染神名火乃）
やまのもみちたをりこしきみ（山黄葉手折來君）

一 右一首入道殿讀出給（イ云）

一首并短歌 作者未詳

あまくものかけさへ見ゆるこもりくの（天雲之影寒所見隠來笑）
はつせの川は浦なみか船のよりこぬ（長谷之川者浦無敢船之依不來）
いそなみかあまのつりせぬ（磯無敢海部之釣不爲）
よしゑやし浦はなくとも（吉咲八師浦者無友）
よしゑやし磯はなくとも（吉畫矢寺磯者無友）
おきつ波きほひこきいりこあまのつりふね（奥津浪諍榜入來白水郎之釣船）

反歌

さされ波うきて流るゝはつせ川（沙邪礼浪浮而流長谷河）
よるへき磯のなきかさふしさ（可依之磯之無敢不怜也）

されは浮く流るゝ
よるへき磯のなしいはさふ
みふねのよりこぬよりの
心なく釣舟のよる磯
のなきかさひしきと
也 磯四寸哥述懐の心
ことゝなりかへて深
と磯といふ也
あしはらのみつほの国
中臣祓曰豊芦原之水穂
國 日本乃名也瑞(ミヅ)穂と
ゆ穀也國人は五穀を米をいふ
は根本云瑞神書あり
あもり てるからへ
いほよろつちよろつ神
八百万神と同語也

一首并短歌 作者未詳

あしはらのみつほの国にたむけすと（葦原笑水穂之國丹手向爲跡）
あもりましけむいほよろつちよろつ神の（天降座兼五百万千万神之）
神代よりいひつきくる（神代從云續來在）
かむなひのみもろの山は春されは春霞たち（甘南備乃三諸山者春去者春霞立）
秋ゆけはくれなゐにほふ（秋往者紅丹穂經）
かむなひのみもろの神のおはせる（甘南備乃三諸乃神之帯爲）
あすかの川のみをはやみ（明日香之河之水尾速）
むしためかたきいはまくらこ（生多米難石枕）

秋ゆけハ　秋すれにし
なきみせしまし
みむろの神　日本紀曰大三輪神曰欲住於日本國之三諸山故即營宮彼處使就而居　但こゝに神乃弟にせるこハ三輪乃神ハ山を居神祢ず
まハ三山の弟にせる也
いまふめりこき

けむすまてに　あらたよの　よくゆき
生左右二　新　乃　好去
かよはむ　ことはかり　いめにみせこそ
通牟　事計　令見社
つるきたち　いはひまつれる　神にしませは
劒刀　齋　二師座者

反歌

かみなひの　三諸の山に　いはふすき
神名備之　三諸之山丹　隠蔵杉
すきしすきんや　こけのむすまて
思将過哉　蘿生左右

元安云いまは乃ひしまむすあきこの也　石東宮枕と云んとて云る詞
ゆりて枕れ　よしといはん諷詞也　岩枕は苔生まて乃ゆかんこの也
こゝをもり　ちまりをちのふ也　おりをも云詞　しるふ乃ゆかうんやきふく
事をりひて苦を見しまりとく　此三諸山乃きおみなるを執て云也
つるきこち　劒太刀ハ神ねりいはひまつる物なれハ祝ひ奉んこといはん
諷詞也　いはひまつれる神にしいまさハ　こハかく祝ひ神ませしは此山の神やまさ
いは此山を見て也　此山をかねて　よめる歌なるへし
かみなひのみむろの　隠れるこハ杉をいはん諷詞也　杉ハ彼山の神木なれ
ハ三諸の山に隠れるを云也　すきしすきんやとハこけむすまてく
ゆてりるをひ見んやとの心を杉をかけて主詞によめる也
いくしたてみわすゑまつる
五十串　采葉云五十と云
いくしたて
五十串立
みわすゑまつる　神主乃
神酒座奉　神主部之
うすのたまかけ　見れはともしも
雲聚玉蔭　見者乏文
れハとて五十と限る
へりす此幣をたてまつる串也　仙曰　箋ハ作
杉云みわすゑまつるとハ神に酒をまつりすゑる也　わさハ酒の字也　采葉ニ云う
す乃たまハむかしハ友位乃ゆゑによりて冠に鈿をつけたりうすとそ
いんさしも也見れハこともしもこハめつらしこと云也

日本紀廿二巻推古天皇十一年十二月朔始行冠位大徳小徳大仁小仁大礼小礼大信小信大義小義大智小智并十二階并以當色絶縫之頂撮總如嚢而著縁焉唯元日著髻華髻華此云于孺又同廿五巻孝徳三年是歳制七色十三階之冠其冠之背張漆羅以縁與鈿異其高下形似蟬小錦冠以上鈿雜金銀為之大小青冠之鈿以銀為

之大小黒冠之鈿以銅下畧 衣服令に冠の鈿乃玉を玉とし云々
是を祓とし此冠を玉するをうすといふも玉みとよめるも 仙覚抄曰 金銀を玉と云
みてぐらをならより
仙覚抄に此歌は皆諷詞
あり 幣をいひてならへせ
るも みてぐらはならへし
ときつるは ならとも
いふによせて 穂積
ほつみとも いふ 穂積
積といふより 鳥網
とをはりさかてといふ
さかてといふ坂に網を張
てする を かて といふ也
さりていはんとて 石走
かむなびをいはん神奈
備山の峠はしらかしと
いはする走をいはひ

一首 并短歌 作者未詳

幣帛
みてぐらを ならより出て 水蓼(みつたで) 穂積に至り 鳥網張る 坂手を過ぎ 石走る 甘南備山に 朝宮に 仕へまつりて 吉野へと 入ります見れば いにしへおもほゆ

反歌

月も日も かはりゆけども 久に経る 三諸の山の とつ宮ところ 或本に云 離宮地

一云 ふるきみやこのあとつところ

これはかみといひ出ん諷
詞なり 走をたつる
月も日もかはりゆけ
どもといへるは是安云を
さ肉恵也 東但此歌
新勅撰集賀二ハとも
古今に人常盤を祝ふ
心なれいはもここつ宮
ゐとふ心ある也さてや
みよし乃檜山 八雲に檜二
大和なる檜のまかこかん
こまとみ こまかさ
滝もとゞろひく事
三吉野乃滝もとゞろ小
此反哥ハ旋頭哥也此
滝乃見あかねかへて

一首 并短歌 作者未詳

斧とりて 丹生の檜山の きりまて 筏に作り 二梶ぬき 礒こぎたみつ 島伝ひ 見れどもあかね 三吉野乃 滝もとゞろに 落る白浪

反歌 旋頭歌

三吉野の 滝もとゞろに 落る白浪 留りにし 妹にみせまく 欲しき白浪

一首 并短歌 作者未詳

婦つゑそのいりしくれハいさ
ねてかくやるまじき
みけつくに　大皇乃志
らせる國をいふ八宅
浄於二播まゐらする由
見ゆさり哥ハ伊勢國を
ほめて讀り賀茂翁
伊勢の音の借字
乃人あしよめるにや
ゆるし　廣く寛の
ころをもまくはしのも
日本紀第二三　妙美之（くはし）云
ほめてほめ給し
いしの原　八宅の云伊勢
内日さす　大宮の枕詞也
朝日なす　照りやさき

やすみしゝ（八隅知之）わかおほきみの（和期大皇）たかてらす
日乃わかみこ乃（皇子之）めしをす（イきこしをす）みけつくに（御食津國）
かみかせ乃（神風之）伊勢の國は（乃者）くにみれはしも（者之毛）
山見れは（者）たかくたふとし（貴之）河見れはさやけく（者左）
やさくきよし（夜氣久之）みなとなす（水門成）海もゆたけし（毛廣之）
見渡せる嶋乃名高し（之）こゝをしも（已許乎志毛）
まくはしみかも（開細美香母）掛まくも（巻毛）あやにかしこき（文尓恐）
さ山乃辺のいしの原に（イ五十師乃尓）内日さす（刺）
大宮つかへ（都可倍）朝日なすまくはしも（奈須目細毛）
夕日なすうらくはしも（奈須浦細毛）
春山乃（之）しなひ（四名比）

さかえて（盛而）秋山乃（之）いろなつかしき（名付思吉）もゝ（百）
しきの（礒城之）大宮人は（者）あめつちと（天地與）日月と
ともに万代ありしかも（尓母我）

反歌

山乃辺の五十師乃御井は（乃者）おのつから（自然）
なれる（成）錦を（乎）はれる（張流）山かも（可母）

二首　并短歌　作者未詳

そらみつ（津）やまとの國（倭）青丹よし（吉）なら山（寧）
越て（而）山しろの（山代之）つゝき乃原（管木之）ちはや（血）
ふる（速舊）うち乃わたりの（于遲乃渡）岡の屋（之）

日もあやにまくはしき乃
諷詞也言坂目細也と
つゝけたり名あすも
同也長短句を交へ惣
うらくはしうらにくはしく
うるはしき也
春山乃しなひさかえて
師説春乃木草花葉
おのゝ栄るをいふ也
也ここに但ずも山林山を
志なひ栄へるをいふ
まていへる諷詞也て大
宮人をかゝる詞也
山乃辺のいしのこね
其他は織さる辞也
そら見つはやまとの國

あこねのはらを　ちとせに　かくることなく　よろづよに　ありかよはんと　山科の　いはたのもりの　すめ神に　ぬさとりむけて　吾は越ゆく　相坂山を

此歌ハ大和より山城を
へて近江へ行人の詠
るなるや亦去説ニ究
ちはやふるうちの渡り
山城國風土記曰謂宇治
者宇治若郎子造桐
原日桁宮以為宮室因
名号宇治本名許乃國矣うちわかいらつこハ仁徳帝と御位をゆづりあひ
ゆつりてかくれさせ給ふ今乃離宮殿ハこれを祝ひ奉りし故實乃所なれハ古今
集にもちはやふるうちの橋守なとよめり此哥もよめるなるべし
瀧乃屋あこねのはら　宇治より山科乃際にありしなるべし
あをによしならの山
イ三八此歌のおなじ或本
歌曰とあるよりの
あるすて此哥なるや
物乃ふの宇治川渡り

3237

あをによし　ならやますぎて　もののふの　氏川渡り　をとめらに　あふさか山に　手向草　いとりおきて　我妹子に　あふみの海の　おきつ浪　きよする濱邊を　くれくれと　獨ぞわがくる　妹が目をほり

3238

反歌

あふさかを　うち出て見れは　あふみの海　白木綿花に　浪たちわたる

3239

一首　作者未詳

あふみの海　泊やそあり　やそ嶋乃　嶋のさきさき　ありたてる　花橘を　ほつえに　もちひきかけ　なかつえに　いかるかかけ　しつえに　ひめをかけ

武士ハ氏あれハ宇治の
枕詞に置きたり
相坂ハ手向もこゝにする
皆枕詞也
いとり垂て　いハ助字也
くれくれと　来くと云
れことを思ふ道　妹か目
をほりハ見まほしさ也
あふさかを打出て見れハ
白木綿花の如く也とし
湖水に打出の濱と云
所ハ此歌によりて云也
近江乃海泊八十とハ
八重の泊ありて近江ハ
八十泊のこと　此海ハ旋頭
もちひきかけ　黐を

3240

枝に付て媒鳥（ヲトリ）とするなり 和名 鶙 毛知
いかるかといふ鳥の名は 和名云鵤（イカルカ）貌（カタチ）似鵠（ニ）
也 而白喙者也 斑鳩同
紫（ムラサキ）ニ大尾短者也 同書
云鴲之女小青雀也
さの母をとらくと
媒（ヲトリ）に鵤（イカルカ）と鴲（シメ）か
まのゝ父母をとらるゝき
もしらてそはへ居
よ哀みのこゝろえ
ひ乃ハ助字也
おほきみのことを
此哥ハ穂積老ヵ罪
ありて佐渡にながさるゝとき

をのか母をとらくをしらに をのか父をとらくをしらに いそはひをるよ いかるかとひめと

一首并短歌　作者未詳

おほきみのみことかしこみ見れとあかぬ
なら山越てまきつめる泉の河乃
はやきせを竿さし渡り ちはや振
うち乃渡りのたきつせを見つゝ渡り
て近江ち乃あふ坂山に手向して
わか越ゆけはさゝなみの志我乃から崎

3241

る時の哥也 おほけり
乃命にかしこみてあれ
ぬ欲やをよろけき
まきつめる 我本を
たちをみるゝ
泉河 山城也 母流也
さきくハ又のかへ
里離乃男されハ福
とりてかへりみ也 夢
なりとなし
さやとぬきいでゝ いかこ山
太刀をうつとかくといふ
日本紀ニ八廻弄槍（ヤタヒホコヲヒラカシテ）八廻（ヤタヒ）
撃刀（タチカキス）ミヽ撃カクとよむ
いかこハいかにハ助字
しいかこ山ハ近江也
いかにハせん泗詞也

さきくありはまたかへり見む道のくま
やそくまことになけきつゝわか過ゆけ
はいやとを里さかりきぬいやたかに
山も越きぬ 剣大刀さやゆぬきて
いかこ山いかにかわかせんゆくへしらす
すて

反歌

あめつちをなけきこひのみさきくあらは
又かへり見ん志かのから崎

一云此一首穂積朝臣老配於佐渡之時作歌也

あめつちをこひねぎ　天神地祇をこひのみてもさらにかひなかりしとの意
身つからのいのちはよしさもあらばあれとのこゝろなり

配佐渡之時　續日本紀九曰元正天皇養老六年正月正四位上多治比真人三
宅麻呂坐誣告謀反正五位上穂積朝臣老指斥乘輿並處斬刑而依皇太
子奏降死一等配流三宅麻呂於伊豆嶋老於佐渡嶋
もゝきね　美濃の枕詞
しか見安云小竹あやしき
行ると云至東ね八峯
也百くさハ何よりもまさる
或説　百茎乃若葉
とうけ行を鑒せり
まきのしもの
日本紀景行天皇行幸
美濃泳宮(クヽリノミヤ)と出る日
向ひに行きかくれ
日向ひ行きかくれる也

一首　作者未詳
もゝきね（百岐年）みのゝくにの（三野之國之）たかきたの（高北之）くゝり（八十一）
のみやに（隣之宮尓）ひむかひに（日向尓）ゆきなびかくを（行靡闕矣）
ありとききて（登而）わがかよひぢの（吾道之）おきそやま（奥十山）
みのゝやま（三野之山）なびけと（靡得）人はふめども
かくよれと（如此依等）人はつけども（雖衝）
こゝろなき（無意）やまの（山之）
おきそやま（奥礒山）みのゝやま（三野之山）

おきそ山　奥磯也
みなけりけれども
ゑ安云麻笥　苧こ
けなり
うみをなす　うみ
苧乃ちきをとりて
てもつ乃くちを云也
いやましくに　波立
くりし上ゟ波頭の
波のきはと云ハ颯也
あこの海八瀬もつし
あまをとめらまつひる
ぐハ領巾のてるを
まこと魚もあり
まくかれと哥にハ
いく仮名にて讀也

一首并短歌　作者未詳
をとめらが（處女等之）をけに（麻笥）たれたる（有）うみをなす（績麻成）
ながとのうらに（長門之浦）あさなぎに（奈祇尓）みちくるしほの（滿来之）
ゆふなぎに（奈祇尓）よするなみの（依）なみの（乃）いや（伊夜）
ますますに（益二）しきて（敷布二）そのなみの（彼乃）いやしくしくに（伊夜）
わぎもこに（吾妹子尓）こひつゝくれば（作者）あごのうみの（阿胡乃海之）
あらいそのうへに（荒礒之於）はまなつむ（採）あまをとめらが（海部處女）
うなげる（纓）ひれもてるがに（領巾文光）
たまきまく（蟹）ながるゝ（流）もゆらに（毛湯良尓）しろたへの（白妙）
そでふるみえつ（所見津）あひおもふ（相）らし（羅霜）

わすれもこひにあへつくれ
いあまやをとめし倭文
あるさゑに袖かり
みすゑれハ衣露
いのちにさへやもさ
阿この海の荒磯の
浪ハやむ時もあるに
我恋ハやむ時なし
とあるへし
あまの橋も　もとも
天橋ハ天乃浮橋ニや
只天のはしなるへし
天ちく地久しかれ
この心を叫く云なるへ
し　山高きねそれ
久しされハ高山も

反歌

阿胡乃
あこの海の(之)荒磯乃上の(之)さゝら浪(小)
吾戀(者)
わかこふらくハやむ時(息)もなし(毛無)

一首　并短歌　　作者未詳

天　文
あま橋もなかくもかも(雲鴨)　高山を(文)高く
雲鴨
もかも　月見の持こせる(有)をち(越)水(乃)
伊取　而　公奉　而
いとりきてきみにまつりて
得之早物
をちえしむもの

反歌

天　有わこまるや哉　如　吾　有
あめなるや月日のことくわか思へる

之
君か日にけに老らく惜しも
異　落　惜文

いくとしもあまこそ
月よみの持こせるを
月嶺乃水の事也　月ハ　精事ニハ　淮南
よみの持こせる水とハ　伊ハ　御字也　月夜見　月の名也
子曰水氣之精爲月　とく
をしきやし　やもしハ御字也　君ハ年ノ老るを也　越得ハ若返る
事ものにかなるを歎息するなるへし
あめなる月日　日かくにハ日每也　君か年なかなか老れハ
をきりてなえまつりせんとのよみなるへし

一首　　作者未詳

沼名　之　ソコ　奈流　モト　而
ぬな河の底なる玉をもとめて
得　之　可毛　呂　而　得　之
えてし玉かも拾ひてえてし玉
可毛　安多良思吉　之　落　ヲシ　毛
かもあたらしき君かおいらく惜しも

ぬな河乃そこなる
此歌ハぬな河の底
なる玉ハ誰人ぞ求
めし拾ひしかお
らんか藻流めるも
ご惜きことよとひて
君か年のゆくをかしさ

3250　3249　3248

いはなへくし
志きしまやまとの
日本乃名之辞の心ハ
日本國ハ人多き中
に君ならで恋しきす
いちきこ思ひをなし
人さはに　人多くと
みちて　みちてと
藤浪の　思ひまつはし
まつはらん諷詞也藤を
もひまつはれるをと
若草の思ひつきに
うつくしくつまなり
き物あれハ思ひつき
君の諷詞也思ひ付にし
式嶋のやまとの國よ　君ならでこひしくなる人二人などゝいふことはなき恋路ならんと

神からとことあげせぬ
神國からよくおさまる
いひたてねまうすこと
神名ハ秘密乃物也
然とも我ハやまさし
ゆく影乃　月も經
ゆけバといふ諷詞也
玉きはる　日もかさ
あるといふ諷詞也
日数重れハ魂極る也
玉限イカケロフノ不用之
おもへかも　思ふやさ
恋れかも　恋れハもやさ
きはみのきはりと同
恋つゝも我ハ渡らん
我ハ恋渡らん也

相聞

一首　作者未詳

しきしまの　やまとのくにゝ　人さはに
みちてあれども　藤浪の　思ひまつはし
わかくさの　思ひつきにし　君がめに
こひやあかさん　長き此夜を

反歌

しきしまの　やまとのくにゝ　人ふたり
ありとしおもはゞ　なにかなげかん

一首并短歌　作者未詳

あきつしま　やまとのくには　神からと
ことあげせぬ国　しかれども　我はことあげす
あめつちの　神もはなはだ　わが思ふ　心しらずや
ゆくかげの　月もへゆけば
玉かぎる　日もかさなりて　思へかも
胸やすからず　こふれかも　心のいたし
末つひに　君にあはずは　わが命の
いけらんきはみ　こひつゝも　我はわたらん
まそかゞみ　まさめに君を　あひみてそ

3254　3253　3252　3251

十寸鏡　あひみてこそとい
へる詞也
やまさめに　思ふ月
に君をとこしふらは
恋やまめとなり
おほ舟のおもひたのめる
大舟はたのむとよむを
いへる詞也のり心
ならしかれは不安
云所也とも痛ね也
久方のみやこをおきて
篭蒙抄云久堅とは月やそらをいふともあれど天をよめば久く
陽としこ云義須又帝の都のあれは天闕なとしいひかれて謂る也
下略　神代紀にもひさかたの天とよめり
いにしへより　いへり
しりとおもふへし

者社　吾　八恐日
はこそ　わか恋やまめ

反歌

大船　能　憑　尓
おほふねのおもひたのめる君故に

ツク　者　雲　無
尽す心はをしけくもなし

久堅之　王都　乎　而
久方のみやこをおきて草枕

羇旅　往　乎　何時　可将待
たびゆく君をいつとかまたん

一首并短歌　柿本朝臣人麻呂

神ながらにことあけ
神のまにまにて
も秘していはずと也
ことさきく　毎事
幸ありませとこ
とさきくまさきく
いりさね詞也
つゝみなく　恙なきと
恙　玉篇ニ　憂也病也ト云
つゝみなくと云所も
同し
荒礒浪はありてもとい
はん詞也ありても
幸ありて見んとのこゝろ
ことさきくまさきく吾ことあけ
けするとは百重波ちへ浪に頻に言挙するといへる詞也

葦原　ミツホ　者　在随
葦原のみつほの国は神のまにまに

事挙　不為　雖然　辞挙
ことあげせぬ国しかれとも　ことあげ

叙吾為　言幸　真福
ぞわがする　ことさきく　まさきく

座跡　恙無　福　座者
ませとつゝみなく　さきくいまさば

アライソ　荒礒浪　毛　登　百重
荒礒浪ありても見んと　百重浪

千　敷　言　上　為
千重浪しきに　ことあげする吾

反歌

志貴　倭　者　事霊之
しきしまのやまとの国はことたまの

所佐　叙　真福　在具
たすくる国ぞ　まさきくありこそ

ますこまれやゆよの　凡安云ことゝ或ハ損じ玉葉此玉ハ接詞のこ
すけて安けまじと詠へハ凡筆ある玉の緒ハよく去年あまつ心ち式
同云播は百首宗書倭歌集　ここち見れおもひりあまに思ひしと
本葉あらりかはすハこすや和云ことゝ或ハ時にも見ねる云ともかんことを
思ひよりて遠ク我家をも見れハ今中の志画とゆ事しことしこと
一或ハこも義別ちや若狭ハ同く義異なるを見ず限りす数多
又日本紀ろ設齋なりみとよむハ凝類すするこし此多の風とつ矢家
まりこえし
ひかきこえく　ひ伐へ
まとゝ此歌ハ遊ハ妻
なりて止（やむ）まこりしと云
借れと女子等ハ云
理をしりて遊ぶと云
玉乃緒の継てといひ
諷詞ゝ
そをしるハ　ちぬと

一首　并短歌　作者未詳

むかしより（従古）いひつぎくらく（言續来口）恋すれば（戀為者）
やすからぬものと（不安物登）玉の緒の（玉緒之）つぎてはいへど（継而者雖云）
をとめらが（處女等之）こゝろをしらに（心乎胡粉）そをしらむ（其将知）
よしのなければ（因之無者）夏そひく（夏麻引）いのちかたまけ（命貯）
かりこもの（借薦之）心もしのに（心文小竹荷）

人しれず（人不知）もとなぞこふる（本名曽戀流）いきのをにして（氣之緒丹四天）

反歌

かずかずに（數々丹）おもはず人は（不思人者）ありといへど（雖有）
しましくも我は（暫文吾者）わすれえぬかも（忘枝沼鴨）

夏ろひく命をかけて
仙云命をしらんとめ
な夏ろひとハ麻を
麻をもきて畫する叫
らゝと命をしき云枕
凡歌云夏ろひく命を
之ハ麻をひくとき
夏乃あつきとを命にそそえ
かたことものゝ心も志のよ　かりこもハ
云義と仙覚說ゝ心も志のゝハ心も常なくと借威ての後西說し是
說なり心も志けくしかりこも八義きの枕詞とそと西好も隠し
そしおもふ遊る　よりをあれらこの氣のをりにてなと
おもくのおもりもえぬ人ハ世にかく程子ゝ指思ぬ人もあるといへと我れ
心もしのゝおもひて忘しもしえぬもとく　イニ此反歌の次ハ川ふ
こぬこのこゝせろかつさ
云平家ゝ此本奥ニ在

一首　并短歌　作者未詳

行しあれまハ來去
年かさねて中絶
しへを待侘る意
思ひたらハ足安
云ふハ辞にあらず
まし至家て地に
心をふハ何でも
き見に物をふ心也
眉こもりいきつき
足安気虫乃眉也
内ニいきつかふ也
玉梓かいこ乃事を云
みて我恋ふハ言者
まつ事をよめる也
松乃根乃まつことを
すといへん諷詞也

あらたまの年ハきへゆきてたまつさの（荒之 者 去 而 梓之）
使乃こねハ霞立なかき春日を（之 不来者 乎）
天地に思ひたらハしたらちねの（毋 足 椅 帯 乳 根 笑）
母乃かふこ乃眉こもりいきつきわたり（之 養蚕之 隠 氣 衝）
わかこふる心乃中を人にいふ物（吾 乎 毋 言）
にしあらねハ松乃根のまつ事遠（西 不有者 松）
あまつたふ日乃くれぬれハ白ゆふの（天 之闇 者 木綿之）
わかころもてもとほりてぬれぬ（吾 衣 袖 裳 通 手 沾 沾）

反歌

かくのミし あひおもはさらハ天雲乃（如是耳師 不思 有者 之）

白ゆふ乃我衣手
白細乃 衣手之同
以下のしはいふ也ハ
何の物を出すに
帳を偏て詩る意
あまえハ諷詞也
をねてきの何ゆち
紀伊の名所也
時者て 時有る意也
にハ漏をもなす時ある
く妹をこふる
やむまとも
おもひやるすべ乃
おもひやるをしすへき
いかなもしハたつき
りて年を経去

よそにそ君ハあるへかりける（外 衣 君 者 可有 有来）

一首并短歌　作者未詳

をはりたのあゆちの水をまなくそ（小治 之 年魚 道之 乎 間 無 曽）
人ハくむといふ時しくそ人ハのむといふ（者挹云 自久曽 者飲云）
くむ人のまなきかことくのむ人の（挹 之 間 之如 飲 之）
ときしかことく吾妹子にわかこふる（不時 之如 尓 吾 恋）
らくハやむ時もなし（良久波 已 時 毛）

反歌

おもひやるすへのたつきも今ハなし（遣 為便乃田付 毛 者無）
君にあハすて年のへぬれハ（於君 不相 而 之歴去者）

てこし　君字當作
妹ニ之ハあやまりなり
わきもこに我こふらく
ハこゝあまりハ是事も妹
まつりそれとしるへく
しこゝにかくも
みつかきの久しきとき
祇田ニ我常ゆくとす
いやとしへておほきまし
こもりくのそこつせのいの
下ふかまもちす我ニハ
妹鏡ならす我ニの鏡
いとん初ゆる鏡を懸けん
古事記ニ曰允恭天皇
乃春宮木梨軽乃太
子妹乃軽大郎女ニ

君字當作妹ニ

3262
みつかきの久しき時ゆ恋すれハ
（楼垣　祇よゝ従　為者）
わかおひゆるふあさよひことに
（吾帯緩朝夕毎）

一首并短歌　作者未詳

3263
こもりくの泊瀬の川の上つ瀬に
（己母理久乃泊瀬之川之上瀬尓）
いくひをうち下つせにまくひをうち
（伊杭平打　下湍尓　真杭平格）
伊杭にハ鏡をかけまくひにハまたまをかけ
（伊杭尓波鏡平懸　真杭尓波真玉平懸）
まだまなす我おもふ妹も鏡なす
（真珠奈須　吾念妹毛）
わかおもふ妹もありといはゝこそ国
（我念妹毛　有跡謂者社）
にも家にもゆかめ誰故かゆかん
（国尓毛家尓毛由可米　誰故可将行）
古事記ハいへにもゆかめくにをもしのはめ

よけまことゝこそあれ
あり久しく天皇崩
後の後世人云へりそれ
弟乃穴穂命安康ノ

検古事記曰此一首木梨之軽太子自死之時所作也
古事記にハ誰故かゆかんとよみ給ふ

それはまぬ太子終に我いかれて伊予乃湯にながされ給ひしに妹
軽太郎女ゆゑニ堪ぬ追ひ行ける時此歌よみて太子ニせまりて妹とみも
ころもりうせ給ふ男死此歌もはかなき事と日本紀にハなし　日本紀の義説
まことあらすわか思ふ妹も玉のごとく鏡のごとく我か妹のなる事や
家なりこそゆかめわか心ニ妹ハとこそにいたりて一所にあらすハ誰故ニ故ある
ゆかんとうらみくやしみ奉らせ給ひしとあるも古事記乃歌ハ不足是也
まわりておほえしも
此為哥二首古事記ニ
いへしも浮ことにハ左
の頃なをしらぬを浮も
人のあいなかれある
いつ乃浮ならぬ恋しきを

3264
又歌
としわたるまてにも人ハありといふを
（麻弖尓毛　者　有云乎）
いつのまにそもわか恋にける
（何時之間曾母吾恋尓来）

3265
世のなかをうしとおもひていへてせし
（世間平倦迹思而家出為）

世のなかをうしと思ひ
家にかへらんと思ひすれども
ゆめのなかにしてかへらんとする事を
のがれんとして家を出しかども
花咲　花咲をゝり　花咲
のかゝりし
秋づけば秋になれば也
丹の穂に　あかきをいふ
味酒を神なび山
日本紀　醸八醞酒
玉篇　醸　汝張切作酒
とゝく酒を作るを
かみともかもするを
いふのかみと云
味酒を神と云
まゝのかみなるべき

わが身やなにかかへりくなん（吾哉難二加還而将成）

一首并短歌　作者未詳

春されば花咲をゝり秋づけば丹のほにもみつ味酒を神名火山の帯にせる明日香の川のはやき瀬に生る玉藻のうちなびきこゝろはよりて朝露のけなばけぬべく恋しくもしるくもあへるこもりづまかも

反歌

明日香河せゝの玉もの打なびきこゝろは妹によりくる鴨

一首并短歌　作者未詳

みもろの神奈備山ゆとのぐもり雨はふりきぬあまぎらひ風さへふきぬ大口のまかみの原ゆ思ひつゝかへりにし人家にいたりきや

反歌

かへりにし人を思ふとぬば玉のその夜はわれもいもねかねてき

玉ものうちなびくごとくこゝろは
よりそふとなり
といふ心得たる也
あゝくしもあらくも
あさみとりの心にあらしと
ゆふぐれにこゝろの
心明らかなる也
とのぐもりて雨
ぬるまとも
あまぎらひ　風のまにまに
あらし
おほくちのまかみの原
八雲には大和と云
まかみは虎を云虎と
いふ事也
口には渢渢也

いひつかへかなれし人
云ひかはしこゝろうるは
しゆきし人此あれ丸の
是ぞともおもひしとの心
かはりし人なをさすと
うちそへし咄時も
乃ほりやらん　或説さて
やらんまやとつけ
おもしとさゝと同音
やさこ師説八義なし
小屋乃志まきや不安之字
是非ある家（一本宿）ぞとも
さ家（一本宿）に屋者や
かれはなれん　捨まて
居らんとは不同し
思乃志まきを　不安

一首并短歌　作者未詳

刺将焼　乃ほりやらん　小屋之四忌屋尓かきこ
将棄破薦平敷而　すてんやれこもとしきて　所撲
将折　折れん　思之四忌平　思乃志まきを　刺
将宿　ねなん君故　赤根さす　晝者終　ひるはしみて
尓野干之夜者須柄尓　ぬはたまの夜るはすがらに　此床
乃比師跡鳴左右　のひしとなるまで　嘆　なげきつる
乃　かも

反歌

我情焼毛吾有愛八師　我こゝろやくもわれなりはしきやし
君尓恋毛之心柄　君にこふるもわか心から

云人乃枕にせんねを　思しねつるは思乃ことをそれ　わするゝや
くうともしきて見し　一本稗乃歯手をやきこ穿き爪ちき淺男さを云ふ
かるは志みしかに　不安云　いめとしもに小の字し　一本稗の字をまつこと訓
此床乃ひしと　不安云海中乃洲とふ見し　仙臼海中乃例をいへと
ふとし我ぶ思乃心はわかすみねは過の後よわからえのこゑくゆねれ
とは床乃洲となる事そ嘆つるかもとき　大隅國風土記云必志里
昔者此村之中在海之洲因曰必志里海中之洲者隼人俗語云
必志　或説二　或説二　此床のひしと鳴とも経くこゑ床のひしめき鳴波ども
わ思やともわをを思を忘やもし忘るゝは我心ゆゑなればぬとと
うちまてゝ思ひし小野
我のいさす人をとも
里人のさまうるを
咄し事むかし
立らくゐこゝまも
立小よかれも居
小そむしをす

一首并短歌　作者未詳

打延而思之小野者不遠　うちはへて思ひし小野はとほからぬ
其之里人之標結等　その里人のしめゆふと　聞手師従　聞きてし日より
立良久乃田付毛不知居　立らくのたつきも知らず居る

こゝをかくもしらず
もし身の上なども
すまひなるべし
親とは乃ち我家すらと
父母乃住る我家
をさへ旅ねのやうに
思はれて安からぬと
すぐしえぬ物を　嘆て
なげくさまなり
あまの雲のゆくらくらに
天雲は風にしたがひてゆくらく
かくくらのことなれば
されども定めなきをいふ
れんとつゞくる諷詞
乱麻のをけをなみとあるも
たゞみだれ心のたとへ

らく乃おくかもしらす親くの
さが家すら草枕たびねのごとく
思ふそらやすからぬものをなげくそら
すぐしえぬものをあまくものゆくらく
らにあしがき乃おもひみだれて
みだれを乃をけをなみとわがこふる千ゑ
乃ひとへも人にしらせずもとなやこひん
いきのをにして

久　乃　於　久　鴨　不知
己　尚　乎　客　宿之如久
不安　乎　嗟
過之不得　乎　天　之　行莫
莫　蘆　垣　乃　思　亂　而
麻乃　麻乃笥　平無　登　吾　流　千重
乃　母　不令知　本　名　也　牟
氣之　尓　爲而

反歌

ふたつなきこひをしすれば常の帯を
三重ゆふべく我身は成ぬ

二　無　平思為　者　平
可結　者

わが出ては恋るといひ
みけよねのあげ出ては
恋ますがやうなりといふ
吾恋る千重のひとへも
我恋乃千分の一も人
にしらせずしなく命
かけて恋んといふ
かくなげくに恋るなり
二つともなくうき恋
すれば、やつれ果て腰
細く帯のしまり
せんすべなきこと
述ぶるなりしかも
きなる身よ君のために
も入居ても歎く事
いとつらきことなり

一首并短歌　作者未詳

せんすべ乃たづきをしらず石ね乃
こゞしき道を石床乃根はへる門を
あしたにはいで居てなげきゆふべには入居て
思ひ白たへ乃わがころもでをおりかへし
独しぬればぬばたま乃くろかみしきて
人乃ぬるうまいはねずて大舟のゆく
らくらに思ひつゝわがぬるよらを
よみもあへんかも

為須部乃　叫　不知　石　乃
興　敷　乎　石　笑　延　叫
朝　而嘆　夕
而　栲　乃　吾　袖叫
之　寝　者　野干　乃　黒髪布　而
寐　味　眠　不睡　徃
良　羅二　作　吾睡　夜等呼
續　文　將敢　鴨

岩乃こゝしき嶮岨なる
石と 石家の根をふむハ
石乃根のとかる内也
あさ庭は
諸本如此点ス一本 あ
さにハ也 あさと和 む相なされ
人乃ぬるらきよしねらそしらぬらまもせすと世人の云ねらもと云なる也
ならふねの乃ゆくらくふ ゆめのゆくことゆめやうなるへし
わかぬる夜をつきてたのもしあへんも よくもかなしとらひつかへて
我ぬるよをつらくらやうに行ん
ひとりぬる夜をかそへん
又しき東せ共無こと此例
し忘辞乃心雖樹丸
こゝにすやまき
我乃数をかそへんとて
百足らすとハ八十ふ

反歌

一眠 夜算跡 雖思
いもりぬる よをかそへんと おもへとも

恋茂二 情利文梨
こひのしけきに こゝろともなし

祇曰ころもあらハ我ひとりやうなとも思ふと云
仙曰利き心もありとまて 玉葉いま

一首 并短歌 作者未詳

百不足 山田乃 浪雲乃
もゝたらす 山田のみちを 浪雲乃

愛妻跡 不語 別之来者
うつくしつまと かたらはて 別れしくれは

速川之 往文不知 衣袂 笑 反裳不知
はやかはの ゆくへもしらす 衣手の かへるもしらす

馬自物 立而爪衝 為須部乃 田付乎白粉 物部乃
うましもの たちてつまつき せんすへの たつきをしらに ものゝふの

八十乃心叫 天地二 念足橋
やそのこゝろを あめつちに おもひたらはし

玉相者 君来益八跡 吾嗟
たまあはゝ きみきますやと わかなけく

八尺之嗟 吾雖嗟
やさかのなけき わかなけき

山田とつゝけ 山田とはこゝし
浪雲乃うつくしつまと云なり
又安云浪も雲も共
にうつくしきと云なり
浪雲ハ玉葉うつくし
はやかはのゆくへもしらぬ
こゝろもてのゆくへもしらす
はやきといふ諷辞也
早川のと云諷辞也
衣手のかへるもしらぬ
くもゆくへもしらぬ也
馬自物 立而爪衝
こいふ枕詞也
馬のふれ やすいふ
諷辞也 やすの字を
たふれとハきる物

為すある人の 立とまり 何と問ハ
遣 平 留 不知 常 者
苦やる田付をしらに さかに 散鈎相
日者 可知
君りかいて たかに出つく人しりかね

そふ心を天地のさへ
いひけるを
玉あへるわが為に魂
こ君が魂とおもひけるを
やさしのおもはず
八尺ハながき歎き
じ也安八坂二字成多
さにたりに　詞乃有り
てうらうき事也君乃

へ（イ）あしひきの山より出る月待と（足日能　従　跡）
人にはいひて君待われを（者　而　吾　乎）

反歌

いもねずとわが思ふ君ハいつこへに（眠不睡　吾　者何所邊）
この夜誰とかまてどきまさぬ（今　與可　雖待　不来）

来ましくと君待といひて人志らんとて月待と同じにハ言ひしと
いもねずとわが為に　祇目不安寝ハいをねずと待侍る君ハいつくへにあるや
かねる我身と我もし
そでにもねずと
なげきていはれたるを
思ひのあまりにもしんとて
乃狐狩に思ひのあまりにてと

一首并短歌　作者未詳

あか駒乃うまやをたてゝ黒駒のうま（赤　厩立　立　厩）
やをたてゝかれをかひわが行がごと（立　而　彼　乎カ　吾　如）

ハ思ひかけてし
高山乃峯のたをり
也安云乎に肬折也
いめたてゝ射目ハ眼
あるなり
とこしきに　仙覚常に
志けくし　稱着なりと
乃ことにまつりごとく
み君を待つし也安云
ここ志きハ床しきて
あるなし　莫吠ハほしいまゝ犬のほえそとて
何垣乃末のきわけて　童蒙抄云芦ハ縫ておぼえ乃芦の垣に芦垣ありなど
かきわけて　心をよめるにや　事なり　さらし人にな告そ事ハ
志りと　よめりまことハ　又知りと　いふ仙覚同説　縫ておほえの芦垣
まの手かきわけてさしてさすとおいこしませと　詠ぜりまでも
こゝろ志てこと人になつげそといふにも心らくにかなひたり　事者棚知（コトハタナシレ）　神守抄

思ひ妻心ゟのりて高山乃峯乃（而　之）
たをりにいめたてゝしゝまつがごと（手折　丹　射目立　十六　如）
とこしきてわがまつ君を犬なほえそね（床敷　而　吾　莫吠　行年）

反歌

あしがきのすゑかきわけて君こゆと（葦垣　之　末掻　別　而　越　跡）
人になつげそ事ハたなしれ（丹　勿　者　棚　知）

能服云しなのみやとハ常也といふハしこれとおなし同音也ふたとハ棚
ありとかけるをもてこれをおもふハ棚ハ常ニ知る也可云ふく几案棚と
ハ元を云元ありもとめてもとよりかたへ諸抄乃説ハ臭ものみたと
も童蒙抄乃説であれ
但類聚ニもことハ棚
ありと和名抄ニ棚乃
こと一義不審なり
作者はみまり
わかせこハきてと
いふ字にのかし
さなかつらはもおもふ
ハ諷詞也集に例多し
かつらハ後かひわかれて
後にゆきあふとて
手袖　真袖と同

一首并短歌　作者未詳

わかせこハまてとまさす天乃原
（妾背兒者　雖待　不益　天之）
ふりさけみれハぬはたまの
（振左氣見者　黒）
よもふけにけりさよふけて
（毛　去來　深而）
あらしのふけハたちまてる
（荒風乃吹者　立留）
わかころもてにふる雪ハ
（待吾袖尓　零雪者）
こほりわたりぬいまさらに
（凍渡奴　今更　公來座）
きみきまさめやさなかつら
（哉　左奈葛）
のちもあはんとなくさむる
（後毛相得　名草武類）
心をもちてみそてもち床うち
（平　三袖持）

あまたにてこそ
色と見てまとる之
なかれあしやみ
蟹乃縄苦屋にて
まつとちかくや
一云おのつから同し
あか羽かかまれハ
さよふけと帰れ

ひらきしわつり
出てうとと
舟乃大船ハのつ
心残もしけれハ
我とい風詞

はらひうつゝにハ君にハあはす夢にたに
（卯管庭　尓波不相　夢）
あふと見えこそあまのたりよに
（谷相跡所見社天之足夜于）
一云わかせこハまてとまさす雁
（吾背子志待跡不來鴈）
音もとよミてさむしぬはたまの
（毛動而烏乃）
よもふけにけりさよふけと
（宵文深去來　左夜深跡）
あらしのふけハたちまちに
（阿下乃吹者　立待尓）
わかころもてにおく霜も
（吾衣袖尓　置霜文）
氷にさえわたりふる雪も
（氷尓左叡渡　落雪母）
こほりわたりぬいまさらに君きまさめや
（凍渡奴　今更　君來目八）
さなかつら後もあはんと
（左奈葛　後文將会常）
大舟の思ひたのめと現には
（憑迹　庭）

3282 3283 3284

君にあはじと夢にだにあふと
見まほしけれあまのたるよに

反歌

衣手に山おろし吹て寒き夜を
君きまさずは独りかも寝む

今更に恋ふとも君にあはめやも
ぬる夜をおちず夢に見えこそ

一首并短歌　作者未詳

菅の根のねもころ／＼にわがおもへる
妹によりてはことのいみも

衣手に山おろし　山嵐也
今さらに恋ふとも
ぬるよをおちすとは
毎夜乃也
菅乃根のねもころに
仙曰ねもころくハ懇
と云詞也菅ハ本の根
乃長く密にころく
にむすかれ根るを
れいそれをよそへてね

3286 3288

なくありこそといはひへをいはひほりすゑ
たかだまをまなくぬきたれ天地の
かみをぞわがのむいともすべなみ
一云　玉たすきかけぬ時なくわがおもへる
君によりてはしつぬさを手に
とりもちて竹珠をしゝにぬきたれ天地
の神をぞわがこふいともすべなみ
一云　大船のおもひたのみて[illegible]
いやとほながく我おもへる君によりては
ことのゆゑもなくありこそと木綿

とこしへにと請るを
ここの事もなくてと
乞安云しるし祈す
るといふ也
いはひへを　乞安云瓶は
るかめ也　竹珠は竹の
きれやうのもの林
りなるを
玉たすきかけねはく
或本反歌　よろしね
母のちとみふ下所の
乃誅を祈て云ふ宗
所の玉の川は祝詞
祝てふねはくとこ
亦つねさ　四の幣也
つゞてこみとる通ス

しゝにぬきたれ
しけくつねき蜜こ
わりこふ 乞利ると
いやこをもく我かる
乃並けてとうき

3285
たらちねの母にも
母もつこうし心中
乃事こし君かにて
むこともくゆるし
きはこうく君かまゝと

3287
あめつちの神を
心ほと

3289
みはかしをつるきの
君安云游そしのる
きとつ会 仙回
清すみの池 大和

ゆふたすきかたにとりかけいはひへを（手次 肩荷 取懸 忌 戸平）
いはひほりすゑあめつちのかみに（齋 穿 居 玄黄之 神祇二）
ぞわかのむいたもすへなみ（衣吾祈 甚毛為便無見）

反歌

たらちねの母にもいはすつゝめりし（足 千根乃 尓毛 不謂 褁有之）
心はよしゑ君かまにまに（者 縦 之隨 意）
あめつちの神をいのりてわかこふる（乾坤 乃 乎 祷 而 吾）
きみいかならすあはさらめやも（公 以 不相在 目八方）

一首并短歌 作者未詳

みはかしをつるきの池の蓮葉に（御佩 平 劔 之 介）

3290
母きこせとも 母はきく
あつうし母乃ぱんこ
かねうらとゝつさやき
よへとうとし
きよすみの池
仙田 大和 玉東 我思
清隅の池乃底の如
ゆくふ 板小母乃い
さめみも 元母いを
只小逢よてぶ迄

3291
いにしへの神の時より
神代より逢ひ中
あしとしけけり
乃跡に何しよく
三吉野ゝ 志米立山
菅の根の 綿をいひ

たまれるみつのゆくへなみ我するとき（渟 有 之 往 古 無 為）
あふへしとあひたる君をないねそと（尓 應相 あいたり 登 有 平莫寐 等）
母きこせともわかこゝろきよすみの（寸巨 勢友 吾情 キヨ 隅之）
池の池のそこわれはわすれし（之 底 吾者 不忘）
たゝにあふまてに（正 相 左右 二）

反歌

いにしへの神の時よりあひけらし（古 之 乃 時 従 會 計良思）
いまのこゝろも常わすられす（文 不所忘）

一首并短歌 作者未詳

みよしのゝまきたつ山に（之 尓）

颯迴之哥ハ吉田
みくゆく人の別
をなけく女の哥也
ひなさかる　国なとの
至りて
治めにと　見安云
御国也
むらとりの　朝立と
いなは颯迴経也
朝立ゆくなり
我かこひんなハ助
字也　をれる我や
恋ん又旅ならハ君や
しのはんとそ
いはんすへせんすへ知
らすの次に一本有りハ

山菅乃根のねもころに我おもふ君ハ
すめろきのみことのまにまに一云王命恐
ひなさかる国治めにと一云天疎夷
治者むらとりの朝立いなは
後れたる我かこひんな旅ならハ
君かしのはんいはんすへせんすへ
しらす一有足日木山之木末尓八字
はふつたのゆきの一無行乃二字
別れのあまたおしきものかも

反歌

足引乃山の木末の
はふつたの別の句
こぬれきのといふを
こちらハ行乃無之の
二字有るなし
うつせみの命をなかく
うつ蝉ハ身をいふ
まもりてわれまたむ
とハあれをいふ也
みよしのゝみかねのたけ
金乃御嶽ともいふ金
峯山也此集天武帝
御製みよしのゝみゝか
乃嶺に時なくそゆきハ
ふりける御製ハ山彩
乃うたといへる也

うつ蝉乃命をなかくありこそと
とまれる我ハいはひてまたん
一首并短歌　作者未詳
三吉野乃み金のたけにまなくそ
雨ハふるといふときしくそ雪ハ
ふるといふそのあめのまなきかこと
その雪のときしきかことくまもおちす
おちすと吾ハそ恋る妹かまさかに

反歌

み雪ふる吉野のたけにゐる雲の

よそにみし子に恋わたるかも

一首并短歌　作者未詳

うつひさつ三やけの原ゆひた土に足をつらぬき夏草を腰になづみていかなるや人の子故ぞかよはすもわが子うべなうべな母はしらずうべなうべな父はしらずみなのわたかぐろき髪にまゆふもちあざさゆひたれ日乃本のつげのをぐしをおさへさすうらぐはし子それぞわがつま

ひゆしけると孝謙
まさり又安芸ニ宸ニ
を云ふハ往ふあもと云
仙が山ニ在り
み雪ふるよしの
序哥之心明し
うつ河乃うつさき
皆ヽ助辞みやけふハて
けすゆきつらね小續く
三宅乃原　大和添下郡
ひた土ハ語をつらねて
ひさすの土ハ皆の
語をつけて
夏草を腰になづみて
又安芸ニ夏草の深きを
分るをいふ

反歌

ちゝはゝにしらせぬ子故みやけちの
夏野乃草をなづみくるかも

一首并短歌　作者未詳

玉たすきかけぬ時なくわがおもふ
妹にしあはねばあかねさすひるは
しみらにぬば玉乃よるはすがら
にいもねずに妹を恋わたり
いけるすべなみ

反歌

いかなるや　やの字なよ
いすものものゝ字皆助
字之いかなる人の子故
かよはすう我妹子と
いふを我をいふなる
妹の故みてみるの
うつなあなハ助字
むべといふ語
髪乃わた黒き枕
頸にか黒きハ助字
まゆふそしあざさく
本結ふて親を結ふ
目の本はけの小櫛
唐櫛あるに對て
云し倭人要ハ大和を
日の本といふより

樗をひくねゑし
さすも乃子
被樗をさすも乃
承しよのゑふうつく
しき女子し
ちりそふむ古りせね
長きみ心に同し
去年の絶の宮の絶間
よしゑやし去年ん よ
ちらく死なんとも
見わたり
川すと梅その心
一云 イ本りくある
あるへし
さふねりの あけよ
よみわつる舟しあ

よしゑやし死なんよわぎもいけりとも（縦恵八師 三火四 吾妹 生友）
かくのみこそわが恋わたりなめ（各鑒社 吾 度 七目）
一首　作者未詳
見わたしに妹らはたゝし このかた（渡 尓 吾者 立志 方）
にわれはたちて　一云 こもりくの（尓 立而 己母理久乃）
はつせの川のをちかたにいもらはたゝし
このかたにわれはたちて おもふそら やす（思 虚 不安）
なげくそら やすからなくに（嘆 虚 不安）
なくにさにぬりの小舟もがも（尓 左丹 涂之 小舟 毛 鴨）
玉まきの小かぢもがも こぎわたり（纏 之 小楫 毛 鴨 榜 渡）

けのうかに舟をうけ月
玉ゆきのをとりいかに
玉をかさりしもし
行けりゆめを
おほ汀んねをも之
をし照やなみなの
おり浪
行けのうる舟
舟書るとかさ
いるふ舟や
いきつらひ引つ
らひて舟を行り
いうてうこゝをいふ
（きしかふ舟を云）
まなみすれこ を
ぬりんとすれでし

つゝもあひかたらふつまを（作 毛 相 語 妻 遠）
一首　作者未詳
おしてるや難波の崎に引のぼる（忍 乃 登）
あかのそほ舟そほ舟に綱とりかけ（赤 曽朋 曽朋 介 介 繋）
ひきづらひありなみすれどいひ（引 豆良比 有双 雖為 日）
づらひありなみすれどありなみ（豆良賓 双 雖為 有雙）
えずぞいはれにし我身（不得 叙 所言 西）
一首　作者未詳
神風の伊勢の海の朝なぎに（之 之 之 奈伎尓）
来よる深海松夕なぎに来依（依 深 暮奈藝 尓）

いそみし我身うき名
いひそりきて我あ
川つていひつていひ
もしるかひえねと
俤にうかひて人し
ゆかする海辺にある海松
めてしめし我を又かりゆかりも今は書ことにかきつけ
まへをも悟らかし意
宮乃うえへ　牟妻郡
乃海邊之山并ハ紀列
むしろのはまに流まく
かりしと深く流
女子をみまくらに
こゝを悟て侍りや
太舟　祖むの祓
ぬるかた　うかひ

深海松乃深目師吾乎 海松乃根乃 去 都麻等
侯みるれきしゆきなり　はなと
不言登可聞　思保世流
いそしこゆもなもしせる君

一首　作者未詳
紀伊乃国乃宮乃うえへ 之 江邊尓 千年尓
障無 之 之 尓
さけるまても　万世まて　将有
登 之 恃而 之 之
こ大舟乃思ひたのみて出立し
瀲 尓 名寸二 係
清きなきさに　ねまきたまよる

けハ紀にやまとして
深く根ありて侯
ふかきと　みえて
あるものハ詞之
さと人乃はやし
しハ助字也　里人の
流をふ下ハ必たもし
けふる事を請し也
あくみなす　さるを
いへん風信之濁良に
さるをしらさもなき
あるにたる文に
ゆきえさるり、又縁云やあたりを勝ち流にし
きのきね　又云膝乃ねかくときまする上矢を云也
もなもん人しくやしも　我をそなたら持しへを服まるる
祖意とりとうて限らいてけまきの
大綱なるてけるところへ

難岐尓 依 法 依
深海松 夕なきに 来よる 縄のりかる
海松之 目 思 遠 法 之 引
そうれ深ゆしうらと　縄のりのひけ
者 絶 登 夜 敷 度 之 行 之 毛 尓
ハしけりや　さと人乃ゆきつ流と来
鳴 兒 成 竹 尤 具 利
なくこなす　ゆきえさるり
弓 腹 振 起 志 乃 岐 矢
ゆすえふりおこし　まのきねを
手 挾 離 兼 斯
二つしまさえ　たちはらん人し
名 思 者
悔しも　恋しと　おもふ人ハ

一首并短歌 作者未詳

3303

里人乃わかにつげらく なかこふる
うつくし妻ハもみちばのちりまかひ
たる神なび乃此山辺 一云彼山辺
からぬばたまの黒まに乗て河の瀬を
七瀬渡りて うらぶれて
妻はあひきと人ぞつげつる

里人乃我ニ告らく
我ニ告らく云ふの意
里人乃告るハ汝か
恋る人ハ神なび山よ
り黒馬ニ乗て七瀬
わたりて物思ひ妻が
るさまにくりかへし
ニ里人乃告けしと
うらぶれて ハ思ひ物
思ひ妻け[illegible]なる也
ミと極[illegible]

3304

反歌

きかずして もだもあらましを いかにしも
君がただかを 人のつげつる

きかずして もだもあらまし
をいかにしも [illegible]
さり[illegible]ハ寝ても云
也[illegible]
も云[illegible]

3305

問答歌十八首

二首并短歌 作者未詳

ものおもはず みちゆきゆくも あをやまを
ふりさけみれば つつじ花 にほへをとめ
桜花 さかえをとめ なをぞも われに
よすと云 われをもぞ なによすといふ
荒山も 人しよすれば よそるとぞいふ
なが心ゆめ

三首乃ハ皆問のさま
ものおもはず道行
ゆくもあをやまや
つつじ花 にほへる乙女
といふ 汎[illegible]をと
句ごとに[illegible]
桜花 さかえをとめ
[illegible] さかえハ盛なる
なれをも われハ[illegible]
吾によすと[illegible]
汝ニよすとなる
とあるとぞ云ふ[illegible]
よりそ[illegible]
荒山も[illegible]

3306

反歌

いかにして 恋やむものぞ あめつちの

いかにして[illegible]
へ人乃より[illegible]
めでて[illegible]

思ひ努こ跡乃ますを也
いかみして立やむ神う
しもい立やまんとて
ちかられこそされハ
こそこ云しとお乃
哥小著るゝ
年乃やとせをきる髪
又安云女子ハ八歳
小く髪をそる手放
るを云し業ぶ女乃
髪うきし八歳小謂
あれハおろりちさすよ
八ハ隠牧乃橘おり

神といのまことよりや心てもり（平檮迹吾八益）
天神地祇とのるゝも我やこりんこそ
しかあれこそとしのやとせをきる髪の（然有社乃叫鑚乃）
わかおなしこをすきて橘のほつえをすきて（吾同子叫赤枝平而）
このかはのしたにもなくなか心まて（能下文汝情待）

反歌

あめつちの神をもわれはいのりてき（天地之尾母吾者而寸）
恋てふものはかつてやますけり（去者都不止來）

いろんとして八云之只やこせとハりりふ心ほとりす
橘のかすゑとそそを髪廣うきふ橘ふ用る物あれハ云ふ給まつ三
や彼乃うきさる髪のもく身とるるふそって汝り哭しもく
下まえとい ちんとく此河乃下かしもくあり哭まえとい也お乃
同乃こと云ふかめく汝り心神を誅ろふすること也り著てされるこそ
汝も立やゆますもく下まえとい ひて神も誅ろるやさき徒をと云也
河めにちの神をも おろ同乃反哥りて此乃神を祈るとも
我ハ立やなさくとりんとそふ著く我こうて神地祇も祈さ
されこ立ニ子揺すゑくやまれすろくりとし此四首同著哥し

柿本朝臣人麻呂之歌
とハお乃同著乃
哥り長短ある云
物おもそてなり乃之
お乃哥ハ二首同著
あるを此哥ハ一首の
哥小そて云るも稀之
あれをろもわれふ
いふこハ世人云處也
あれハいかふ世人いく

柿本朝臣人麻呂之歌集云　ものおもはす（不念路）
ゆきゆくもあをやまをふりさけみれは（去裳平振酒見者）
つゝしはなにほえをとめ（都追慈亦太遥越賣）
さくらはなさかえをとめ（作楽佐可遥越賣）
なれをそもわれによすといふ（汝平叙物吾尓）
われをもそなによすといふ（吾平叙物汝尓依云）
あれやまも人しよすれは（去女符念也念社歳）
いつふおもふやわりへこそしの八

3312 3311 3310

いまを渉て、かなさえも
さりしやよしさかりと云
おもへこそちのや世
さへやとみて来まで
自問自答して云て
これ八年乃わかさかりし
るかハ切し髪乃のひく
とし見ゆかハるし也
さよはひは さハ假字
さくもり さもさハ假字
以ハ雪ふり雨降来て
催しきふ夜ハ明ゆく
雉なき家鶏なけハ
入て 将ねせん此戸
あけよと云
さよハあけ此夜ハ旭ぬ

とをきる髪とわか身をすくり橋
乃かさえをすくり山川乃下おもひ
ちくおのこゝろまく

二首并短歌 作者未詳

こもりくのはつせのくにゝさよはひに
わかきたれハ棚くもり雪ハふりきぬ
さくもり雨ハふりきぬ野つとり
きゝしハとよむ家つとりかけもなく
さよハあけ此夜ハあけぬ入て

云續
こもりくはつせに云
古ハ國郡里邑乃ふ別
今乃やふハなかれ坂
初瀬もも難波なとも
國といへりこハ石かみ
まつさきなるも雅言
と巡切をいふて
隠口乃泊瀬 其ね言
わかすめろきと
父母とみのつや一家
乃をされハこわか帝
ことわるへくさもとこ
一説あを云如ミ私お君ト云起
こゝとも忌妻ゝう
とくのへし

あされんは此戸あけせよ

反歌

こもりくの泊瀬の國に妻あれハ
石ハふめともなほそきにける

隠口乃泊瀬小國に夜ハひせす
わかすめろきと奥床に母ハねたり
石床に父ハ寝たりおきたゝハ
母しりぬへし出ゆかハ父しりぬへし
ぬはたまの夜ハあけゆきぬこゝた
くもおもふこともなしこもりつまかも

3317　3316　3315　3314　3313

なりてもとらね云々
あるに逢ふ瀬難き也
この書 他書と同
川乃瀬の岩と
石ふむといふハ石のかど
也 玉集に渡りてといふ石
かどとふまれる也
うまのこまハ黒駒
と云 黒駒とりわたり
つぎねふ 山代の枕
詞 一云 山代と大和
の堺つきを云 玉集
一云 つぎねふとは
和ス 但日本紀十一 菟藝
泥赴と云 ツギネフと訓
馬より 一云ふされる

反歌

川乃瀬のいしふみわたり野干玉の
くろまのくる夜ハ常にあらぬ鴨

一首并短歌　作者未詳

つぎねふ山しろの道を人つまの馬
よりゆくにおのつまのかちよりゆけば
みるごとにねのみしなかゆそこおもふに
心し痛したらちねの母のかたみと
わがもたるまそみかゞみにあきつひれ
おひなめもちて馬かへわがせ

反歌

いづみ川わたる瀬ふかみわがせこが
旅ゆき衣きぬれひたむかも
まそかゞみもたれどわれはしるしなし
君がかちよりなづみゆく見れば

すこしも そこの云
心肩に 彫鵃とし
はまつひれ 奈肩乃
かゞやきは蜻蛉乃羽の如
くなるを蜻領巾と云
此哥夫婦の情へと表し
て感慨ふかし
いそぎ河渡る瀬ふかみ
あきつ城の名をあらはしゆくと此
まそかゞみもとは 類聚三六巻白妙にあらんとも表と和
かたみとも一云此哥乃お三 或本反哥と 河上 或本云を云
しあるもの 或本此哥をあるまさるえハと訓ても宜し 信開
馬かはゞ妹かちならん
そも夫乃苦の哥也
馬買て我妻もし嬉
歩行ならば 夫もよし
其河の石ハふむとも云ひ

馬かはゞ妹かちならんよしゑやし
石はふむともわはふたりゆかん

一首并短歌　作者未詳

ちかそしてさもふりん(上)と
き乃国の濱よ
紀伊乃海岸に拾ひ
乃夫を待女乃夕卦
問し事也と注る意也
夕うら 夕卦と同
わきもこや 二言ハ女を
よひかけて占乃告
る言也
入りあり 被是乃浪之
きよる白玉 おもり
行ひ玉ひろひんと
つかてとよみし首
尾に真珠ありて
ひろふ玉を指之
久ならハ 増る日数之

君ハきこしし 君の
帰り来るをまち
わふ事を君ハいさ
のしる意なるを
杖つきもつかすも
君か行くてかたに
ゆく杖もなくあとを
行かれしみちを
まとふ女の意也
しらぬこす巨勢路
巨勢路大和之巨勢
を巨勢の根本に
我ハこえてまちあ
らすかなしさすへき
ふさわしきとゆる
と行へゆく男の意

木乃国の濱によるといふあはひ玉
ひろはんと云て妹乃山せの山越て
行し君ハいつきまさんと玉桙の道
に出立夕うらをわか問しかハ夕うら
乃吾につくらくわきもこやなかまつ君
ハおきつ浪きよる白珠辺つ浪
のよする白珠もとむとそ君か来
まさぬひろふとそ君ハきまさぬ
久ならハいま七日はかりはやくあら
ハいま二日はかりあらんとそ君ハ
きこしゝなこひそわきも

反歌

杖つきもつかすも吾ハゆかめとも
君かきまさん道のしらなく

たゝにゆかすこゆこせちから
いはせふみもとめそ吾かこし
こひてすへなみ

さよふけていまハあけぬと戸をあけて
きへゆく君をいつとかまたん

門にゐしいらつこうちにいたるとも
いたくしこひハ今かへりこん

さよふけくといふは　是亦待女乃寝る紀へゆくは紀利へゆきすぎし
門にやすらふをとゞめん　是は男也是乃寝る門戸に立待るをとゞめて
門に待るもまづそのまゝにしてたちまちにいふなり
しばしたゝずむなり

譬喩歌

一首　作者未詳

しなたつ　つくまさのかた　おきなかの（師名立　都久麻左野方　息長之）
をちのこすげ　あまなくに　いかりもちき（遠智能小菅　不連尒　伊苅持来）
しかなくに　いかりもちきて　おきて　吾を（不敷尒　伊苅持来而　置而　吾乎）
しのばす　おきなかの　をちのこすげ（令偲　息長之　遠智能小菅）

しなたつる筑麻野
乃狭野方（サノカタ）しさのかた
は仙覚抄に茨子方と花
せ類聚三代格に合歡木（ネフリ）狭
野方術宿木（ネブノキ）なりとまた
の説あり其外にも猶
とあり別にも注とき
おきなかの遠智とは息
長く遠さにさかむ花
になり　筑麻も近江　遠智も近江坂田郡也
伊苅持来て（イテヨス）　伊は助字　刈持来てなり
吾をしのばす　都て如此　但令偲と云しのびすゝむる心にもとりきのつゝみよせて偲

しのばんとよみても心は寄同じく　しのばせるかたりけるへし　此歌は男方
菅をとり来ても世すに置もせねはかりしてまてしばしてかたりし
しのばすとありけるの遠智の小菅は重は立ち（？）ける古歌
の事ゆへ見れはやそるにまさのことし此小菅一つをみに二めるる
へし譬喩せるは只あはせん女をと歌の事にあそせすて家内へ
おもるを立出小男是よめるのみやさありしと小菅を女すくめのとこ来
てあまずむすびて重るを家内に重ありいまゝにあはせぬかにとゞへて我
を思ひてるとりかるへし　仙覚抄乃さとへ的古歌也や非信用

挽歌

一首并短歌　作者未詳

かけまくもあやにかしこし　藤原の（掛纒毛　文恐　藤原）
みやこしみゝに　人はしも　みちてあれ（王都志弥美尒　人下　満有）
ども　君はしも　おほくいませど（雖有　君下　大座常）

かけまくもといふも
誰乃様方のことは申し
れねと藤原の朝廷
皇子を敬へとえり
みやこしみゝし都に
しみゝくといふ心之

ゆきむかふ　ちよゆき
こそしむかふなり
君か御門を　御殿の事
おそれと思ひなから
恐なから頼となして
ひたらして　いつしか
いつかまりよせての心
もち月のみちたらん
月のことくおもひなと
云しおんも月立て
見ゆるも弓月の八
[illegible]
帝の立せ玉ふと云
[illegible]
[illegible]
植槻の上の松の下道
より
ありて国見をさせ
まいらせし事
おはしますの汎謌
さす柳ねはる梓
根のつよき事を
つかさどるよりして
八梓弓をとりての
十月の日射場始と云
まつりの事にて公卿
事にて射る儀也
あるは我の目しもまなこ
殯宮の事にて思ひね
心を云しみ夢現かと
見る人の事にて
白たへのかさりまつり

ゆきむかふ年の緒長く仕へ来て
往向　仕　而
君が御門を天のごと仰ぎて見つゝ
之　平　如天　而　作
畏けど思ひたのみて何時しかも
雖畏　憑　而　何時　可聞
日足らしまして望月の満しけむと
日足　座　而　十五　之　多田波思
我が思へる皇子の命は春されば
家武登　吾　皇子　余　者　避
植槻が上の遠つ人松の
者殖　槻　於　之　待之
下道ゆ登らして国見遊ばし
湯　登　之而　所遊
九月の時雨の秋は大殿の砌しみゝに
九　之　四具礼　之　者　之　志
みゝに露負ひて靡ける萩を
義弥尓　負　而　靡
珠たすき懸けて偲はしみ雪降る
手次　而　所偲　三　零
冬の朝はさす楊根張る梓を
者　刺すやなぎ　張　梓
御手にとらし賜ひて遊ばしし我
御　二　所取　賜　而　所遊
王を煙立つ春の日暮らしまそ
王　平　烟　立　日暮　喚犬追馬
鏡見れど飽かねば万代にかくし
雖見　不飽　者　万歳　如是
もがもと大船の頼める時に
欲得常　之　憑　有　尓　涙
泣く我目かも迷へる大殿を振り放け
言　者　大　矣　振放
見れば白栲に飾りまつりて内
細布　鳴　餝　奉　而　内
日さす宮の舎人も雪栲の
刺　方　或作　雪
麻衣着るは夢かも現かも
衣服　者　鴨　現前
くもり夜の迷へる間に
鴨　跡　雲入　之　間

3326　3325

障經（さへふ）業吉城於道從
いはれのみちゆ角さはふ
石平作神葬奉
いはれを見つゝかむはふりはふりまつれ
者之呼不知雖思
ばゆくみちのたつきをしらにおもへども
印平無見雖歎奥香手
しるしをなみなげけどもおくかをなみ
無見往觸之松矣言
御袖ゆきふれし松をこととはぬ
不問雖在荒玉之立
きにはあれどもあらたまのたつ
月毎天原振放見管手
月ごとに天の原ふりさけ見つゝ玉だすき
次而名雖恐有
かけておもはなかしこかれども

白布をしてかざりし
あらかとはりも此集ふ
乃はへ入といふ今人ハ
しらでは忍安云葬礼
の時の白旗也此集二番
葬りもや阿礼也葬
殯宮とし白布ハ師説
かゝりしかのまよふ
べき説也
きのうへは大和の此集
第二高市皇子殯宮の
時の人丸哥の詞也
いはれのさかふ同し石
の枇経石村ハ大和也
おりゐにも出るをあはれ
墓所の事也所のありハ

皇子死去月朔日の事也皇子の神かくれまし
ヽ松をみて植ゐたる
形見のやうに朝夕にかよひ見て思ひいずるを
玉ハ初草の玉なり詞也
いはれの石村山也
おほきみは乃ハ助
字也雲をも葬の
よそふる也巫山の古
事なりとや

反歌
角障經（さへふ）石村山丹白栲懸有雲者皇可聞
いはれの石村山にしろたへにかゝれる雲はおほきみろかも

一首　作者未詳
礒城嶋之日本國爾何方御念食可津禮毛無城上宮爾
しきしまのやまとのくにゝいかさまにおもほしめせか
つれもなききのへの宮に
大殿乎都可倍奉而殿隱隱座者朝者召
大殿をつかへまつりてとのごもりこもりいませばあしたにはめし

しきしまの日本やまとの
此哥もおとに同時に
やがて薨りたまひし
大とのをつくりて
廟を作りてとじこもれ
もりとは殯宮に
歌ふべし
このくもり　こゝもりの
こもりこもりいませバ行くにハ

3327

汎渢し磨ニこもりかくれ
すみし殿こもりのみ
いさよふにおきて
ゆふ世り明日任の
たるれ しろいふと
いふ汎渢し由世の
みのやふ召すとを待
居れども召すと然ふ
いふ自ふ古えりたる
申ち共と首尾し

きくにし(而使)夕へにはめして使へ(遣)にり
とねりのこらは(之)ゆくとりの(者)むらかり(群)
てまち(而待)ありまてと(雖待)めしたまはねは(不召賜者)つるき
たち(刀)とぎしこゝろを(磨之心)あめつちに(天地尓)おもひのへ(念)
こいまろひ(展転)ひつち(土打)なけども(哭杼母)あきた(飽)
らぬかも(不足可聞)

ゆゑさち 汎渢ことゝ心こハ忠節を…
おもひしらし 忠ひのしハ御字 十二 忠いちしと和ス
いつちるけとも 又安
云とハ云こハ云とかと云
とゝさゝの字の王
又安云百小竹ハ枕

一首 并短歌 作者未詳

もゝさゝ(百小竹之)の三(三)野のおほきみ(王)の

3328

乃無き云云のとハ無の
王ことく云るく三野
王至来ハ美奴王乃諸兄父
布しのむまや 又安云
東ハ左る寮西を
右る寮至来寮ハ禁
中のるを此く云るく
至ハ家ニや東西
むまや あるべし
云てかふにくまし
御厩之 至も挫寄

にしのうまや(金厩)たてゝ(立而)かふこまひむかしのうまや(角厩)
たてゝかふこま(飼駒)くさこそは(草社者)とりて(而)かひなめ(飼旱)
みつこそは(水社者)くみて(挹而)かひなめ(飼旱)なにしかも(何然)
あしけのうま(大分青馬)の(之)いはえ(鳴)たてつる(立鶴)

反歌

ころもての(衣袖)あしけのうま(大分青)の(之)いはゆるこゑ(嘶音)
こゝろ(情)あれかも(有)つねゆ(常従)けに(異)なく(鳴)

也葬場乃らるとこて無し諺るかや
衆けりみの王の葬場の門るとこて
ころもての何けの仙田けとハ白きをとハけとこて汎渢ニ
衣まのとをつくも又安云衣ニ此白きを此くもし至来至も葬
そ乃人乃白衣にけてる乃白きをとうつて諺るかやてるも常ける常

万十三 卅五

一首　作者未詳

白雲乃棚引國乃あをくものむかふすくにの（之 曳 之 之 向伏）
あま雲のしたにある人はあのみかも（乃 天 有 者 妾 耳）
かも君にこふらん吾のみかもつま（鴨 尓 蓋 耳 鴨 夫君）
にこふれはあめつちにみちてこふれ（尓 戀 礼 薄 滿 言 戀）
かもむねのやみたるおもへかも意の痛（鴨 之 病 有 念 鴨）
きわかこふる日にけにまさるいつ（妾 叙 尓 異尓 益 何時）
はしもこひぬときとはあらねどもこの（橋物 不戀 等者 不有 友 是）
なか月をわかせこかしのひにせよと（九 平 吾 之 偲 丹為 與得）
ちよにもしのひわたれと万代に（千 世 尓 物 偲 登 尓）
語りつがへと始めてしこの九月乃（都我部等 而之 之）
すぎまくをいたもすべなみあらたまの月（其 呼 伊多 母 為便 無見 之）
のかはればせんすべのたどきをしらに（易 者 將為 須部 乃 田度伎 乎 不知）
いはかねのこごしきみちのいは床（石 根 之 許凝 敷 之 石）
のねはへる門にあさには出ゐて（之 延 尓 朝 座 而）
なげき夕には入ゐこひつゝぬ（嘆 數 而 座 作 烏）
ばたまの黒髪しきて人のぬるうま（之 數 而 寐 味）
いはねずに大船のゆくらゆくらに（寐者 不宿 尓 之 行良 行良尓）
おもひつゝわがぬる夜らはよみもあへ（作 吾 寐 者 數 物 不敢）
ぬかも（鳴）

かうこれたるくと云　通考
此首葉場なりても
其玉のるをとえよ
めるとあそあれん
白雲乃よりいくに
普天乃下にはわがのみ
吏りをそれて恋ふる
と此身にせてかゝる
むかふを向伏と云
恋れも恋れはらも
おもへかもいふかも
猶の病する向こゝろの
いたきなり如此嘆て
此のいはせるにとて九月
を偲を恋る君有り
せよと云ふ萬代まで

此月を思ひ恋れと云
恋して語を始めて
こゝろ此月を云始て
し此夫の別月なるや
語りつぐへ語りつがへ
しるきを云ふにしるき
とよみ此せんすべく
乃ひつきを云てまを
此外此下此巻の中
七丁めに一首乃異に
て其但下に詞か此
出り結句をかはる
よくはたしきもあへん
ゆもゆかりえ考て
此見へし

のかは瀬り　諸本如
此和ス此にかつけかは瀬と
かハス上は瀬とあれ
いへも上は瀬と和ス
へきをかやうに改読本ニ
鵜を八つかけし
仙曰鵜一貫とよむ八頭
は鵜を四ツて出来へ
は一貫ハ八ツをいふ
あまの仙説にも及ふへす
只鵜を数多漬せし
此哥数多わり事を
さりかたくの序也
くはしめ　美女之日本紀
安閑天皇御歌の文字
鮎をゝしみ　尓

三首　作者未詳

こもりくのはつせの川のかみつせに
鵜をやつかつけしもつせに鵜をや
つかつけかみつせのあゆをくはしめ
しもつせのあゆをくはしめくはしめに
鮎をゝしみなくさのとほさかり
ゐておもふそらやすからなくに
なけくそらやすからなくにきぬこそは
それやれぬれはつきつゝもまたもあふと
いへ玉こそは緒のたえぬれはくゝりつゝ
又もあふといへ又もあはぬもの
はつまにしありけり

こもりくのはつせの山あをはたの
おさか山ははしりての
よろしき山のいてたちの
くはしき山そあたらしき
山のあれまくをしも

なくさの遠さかりゐて
鮎をゝしみて去
なとしなるさとも
機をる梭しかれハなくさ遠さかるゆへよ遠さかりてれ汎くはあれとあはぬこと
ことはとてなつてかたくさなしかは遠さかりゐておもふそらやすからなくに
それやれ縫ハそれハ助語之　ゐもとしゐてもはなちもなくきぬてもと
なてあたれハきぬとをとハまたもあふ
来をとりて此書ふハ一すい別遠さかりてハまたもあはすとゝ死別の歎き也
こもりくのはつせの山
隠口乃長谷打り
かたすれと本義の
らすし此哥の口訣に
淫惜り
青幡の　忍坂山乃枕詞
也　忍坂山とちかし
まってかよしきのさくらのてらきは　口訣別に註し侍

3335　3334　3333　3332

高山と海こそハ　山ハ
高山と海こそハ山ハ山
乃まゝにしてかくもうつしくま
すと現なれ海ハ海の
まゝにてさりすなるを
小海なるめ人ハ花物
すなはちあさき世の人
よ也　うつせみと
現なる也見安示現
あきらか也と云ハ也
おほきみの命をかしこみ
勅使の當たる也
御さかへて秋つゆ世
人乃統手也　見安云
此の意ハ
如くくる也

まのこをや人のいひつる
直ならぬことをいひつる
むとて我心はなれの
山と言なりけるみかの
伝る我ハおもふなり紅
紫の色々あそるをと
く成とすハまゝを
忘れぬも行くにと
まりこゝや人乃
心也
玉村こに乃みゆきハ
或本ニ俵は玉神鳥の
浜ハ屍をみるてよ
める也　みつゆり
ひまする　太の川
神乃海り　神鳥の

たか山と海こそハ山なからかくもうつしく
海なからしかもたゝならめ人ハ
花ものそうつせみよ人

一首并短歌作者未詳

おほきみのみことかしこみ秋津洲
やまとをすきて大伴の御津の浜辺
ゆ大舟にま梶しゝぬき朝なきに
かこの声しつゝ夕なきに梶の音しつゝ
ゆきし君いつきまさんと大うらおきて
いはひわたるにまかことや人
のいひつる我心つくしの山のもみちはの
ちりすきにきと君かたゝかを

反歌

まかことや人のいひつる玉のをの
なかくと君ハいひてしものを

二首并短歌作者未詳

玉ほこのみちゆき人ハあしひきの山
ゆきの野ゆきたゝすわた川ゆきわたり
いさなとり海ちにいてゝかしこきや
神乃渡りハ吹風ものとにハふかす

3336

濱乃邊をとりかかや
のとかくしかりす立浪
もおかりよ　仙日のと
ふかりすとハ　歩まよ
ふ演と云し　日かりよ
しまもとんをろかとしまもと云し
誰り心いよりとりも
しまりとし溺死の意
鳥乃音きこゆる
人鳥ハ鵜て鳥のねぞ
りりきこゆる海かわ
是もおこ同しつある
へし悼海を屍かり
かえ乃きぬ　裘也
すゝまそきぬよ
裘ハすゝまそハきぬ

立浪も（母）おほにはたゝす（跡　不立）とゐ浪（跡座）の（之）
乃さふる（塞）道を（麻）誰か心いたはりし（勞）
とかもして（跡鴨）直（直）渡りけん（異六）
誰り心をいたはりて其まゝ直に渡りてうせ　玉葉おほかたにハあらぬらん心

鳥乃音（之）きこゆる（所聞）海に（尓）高山を（麻）
障り（障）となして（所為而）奥つ藻を（麻）枕となして（所為而）
ひゝるのきぬ（我葉之衣）すきそきぬよ（浴　不服尓）いさな魚（イサナ）
取（トリ）海乃（之）濱邊に（尓）うらもなく（浦裳無）ねて（所宿）
ある人は（有者）母ちゝに（父尓）まなごにかあらん（尓可有）

3337　3338

故を浪にひかれて
かへらぬの意
うらもなく　死人乃
思ひかり伏居し様を
ますを云し　おし浪
思ひきことをつてめや
云ことの傳ハ云傳も
やする家を問ども
あることもむつる
子の如くに答ねむと云し
云へども云ことなくし
なき人を悲しみも
しかくりハ大かたまりて
まつこらし父母妻子
待乃人に様ならせる
人の自他悲しき意

むかくさ（六　蒻之）妻かありけん（香　異六）思ほしき（布）
言傳めやと（八跡）家問へば（者）家をもつげず（跡　平母　不告）
名をとへど（谷）名だにもつげず（母　不告）なく子（哭）
のごと（如）こととはず（言　谷　不語）思へども（鞆）
悲しき物は（者）世の中なれや（間　有）

反歌

はゝちゝも（母　毛）妻も子どもも（毛　等　毛）高々に（二）
来んと待けん（跡　異六）人乃悲しさ（之　沙）

蘆檜木乃道者（将行）
あしひきの山ぢはゆかん風ふけば（者）
浪乃（之）さふる（塞）うみぢ（海道）は（者）ゆかじ（不行）

3339

行しひき乃山路も
溺死をおほれしぬ
無疵をいやみてし
玉ぼこ乃道ゆ出立
彼溺死乃人乃旅途
乃さまを詠出し
もおのおのか意矣
彼の方あれハ下るお
悟せし翔ちゆけ
太りる用ひし
かしこきや　神といふ
枕詞　神ハ恐るゆゑ
神の渡　神崎の濱
乃事なるべし
ゐる也　入江入海を
このやうに入ぬる渕

一云備後國神嶋濱調使首歌

玉ぼこ乃道ゆ出立あしひき乃
野ゆき山ゆきにはたづみ川往わたり
いさなとり海ぢに出て吹風も
おほにはふかず立浪ものどにはたゝず
かしこきや神乃わたり乃
しき浪乃よする濱べに高山を
へだてに置てうらぶちを枕にまきて
うらもなくこやせる君は母父乃まな子にもあらん

3340　3341　3342

也汭(ウラ)ハ入あふ所と　玉篇云水相入貌
潭唐韻云深水也
誰ることをいふ也と
おほかたよろ心ひろし
とりもこあり用し
四なるべし
もちこともつまも
おもひ
家人乃まつらん
津ハ人乃流れよる所
しきりなるともあき
何ことにもかまわず
と嫌ひ思ひ
ゐるわたにふせる
おのこゝそ枕まま

わかくさ乃つまもあらんと家とへど
家路もいはず名をとへど
名だにものらず誰がことをいとほしとかも
とゐ浪乃かしこき海を
たゞわたりけん

反歌

母父もつまも子どもも高々に
こと待らん人乃悲しさ

家人乃まつらん物をつれもなき
あらいそをまきてふせる君かも

うらぶちにこやせる君を今日〳〵と
こんとまつらん妻しかなしも

きてとはまし月
いる浦乃きよする
入海をいふ入る浦
をいる浦と云なり
あくは右の歌の心同
此月は君もきなんと
此歌は防人（サキモリ）まかりし
者乃うせたるをしら
ずして女乃うたと
もみちはのすきていぬ
おのつからに此歌を
防人のうせたるを
覚えす　初の此詞
をころのみと　ゆき
いきつきしそのふは

まつらん妻乃かなしも　うら浪
乃きよする濱につれもなくふ
したる君か家ちしらすも

一首并短歌　作者未詳

此月は君もきなんと大舟乃
思ひたのみていつしかとわか待
居れはもみちはのすきていぬと
玉ほこ乃使ひのいへは螢なすほ
のかにきゝておほつちをほのほとふ
みて立て居てゆくへもしらす

よもふ心とあこそて
のみといひみてく云
おもひてし或は招魂す
れはこと
杖たらぬやさかの嘆き
杖は一丈に杖たらねは
八尺といはん諷詞也八
さかの嘆きはなかき歎
きとおほしけり但
仙覚は八乃坂をとる
いきつきしさかのこゝろ
息れもなく泣らしと思
ところ一説不ねん
あま雲のゆきのまにく
ゆきにし天雲は諷詞也
いるしゝ乃　猪は前

す朝霧乃おもひまとひて杖たらず
やさか乃なけきなけゝともしるし
をなみといつくにか君かまさんと
天雲乃ゆきのまにまにいるしゝの
ゆきもしなんとおもへともみちのしら
ねは獨居て君にこひつゝねのみし
しなかる

反歌

葦邊ゆく雁の翅を見るごとに
君かおひこしなくやしおもふ

見し鹿のことくなりとも
死なんとこそ諷也
行へゆく房のつさき
又妻云君か佩てあるく矢とハやなくゐを云又ハ矢をもてる口すさなく
それやうなるを云　要案此哥ハ防人か生くの世ニ弓矢ニ堪能
なりしを詠けるなく然るにて芦の房のなれきをみへるて
賞美を言ひ出しとも

一云此一首防人之妻所作也然則上長歌亦此同作歟

又あるくなりハ宅かま
此哥ハ大和の十羽乃
松原をよめりし夫の
旅なる女の様なるや
ハハ又かくなりきを
宅かなてくうつ
ゆきこハの松原邊
見りけるとそや
小子なりしにいさ

一首并短歌　作者未詳

見まくほりハ雲居にみゆるうつくしき（欲見者　所見　愛）
とはの松原みとり子ともいさやわ出てみん（十羽能　小　等　率和　将見）
こことさけハくにゝさけなん別れなハ（琴　酒者　丹放甞　避者）
家にかさなんあめつちの神しうらめし（宅仁離南　乾坤之　志恨）
草枕このたひのけにつまさかるへしや（之　此羈之氣尓妻　應離哉）

反歌

草枕このたひのけにつまさかり家道おもへハいけるすへなし（羈之氣尓　一云　羈乃氣二為而　放　思　生　為便無）

此く彼松原をとん
とし見るくハ旅なく
おつりきき此松原のゆ
をとらて見わたりこそ歌き
乃意也
ここさけハ妻離の心
我ことまかのゆやとさけ
むことあくハ同心の中
ゆくさけようにこと別なれ宅を同心境をはなれうせ
恨をいきくほし別なりこ一家ニて別れハおれたねなるにかなるさき
宅かなにかゆる十羽の松原ニそうせるる諸ニ天神地祇と可恨
此とハ乃けになりや　此詠乃始にも我こ別くるさ事のハ同心一
家乃中ニてこそハなしなるくれこころまかるハ妻と死別さるる
草枕此たひのけにさハ彼うせてる男ハ旅ニて旅人のよみて在なる
旅なるあと哀感の故也

萬葉集巻第十三終

貞享三年寅卯月十一日書于新玉津嶋之庭花下畢　墨付四十二枚　季吟